



報道提供資料

令和6年7月17日（水）午後4時

問合せ：大阪市鶴見区緑地公園 2-136
（公財）国際花と緑の博覧会記念協会

企画事業部長 三谷彰一

企画事業部企画事業課長 佐々木洋平

<https://www.expo-cosmos.or.jp>

090-6913-1445（7月17日のみ）

06-6915-4513

2024年（第31回）コスモス国際賞の受賞者は ウィリアム・ジェームズ・サザーランド博士

公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会（会長：御手洗富士夫）は、7月17日開催の理事会で、コスモス国際賞委員会（委員長：山極壽一）、同選考専門委員会（委員長：池谷和信）からの報告を受け、ケンブリッジ大学動物学科研究部長ウィリアム・ジェームズ・サザーランド博士（68歳）を2024年（第31回）コスモス国際賞の受賞者に決定した。

「エビデンスに基づいた保全」を提唱し、世界中の膨大な研究論文より情報を集積したウェブサイト構築する等、生物多様性保全のあり方に革新をもたらした。

サザーランド博士は、「保全科学（conservation science）」のパイオニアとして、基礎研究から環境政策への提言まで多様な研究、活動に尽力し、「エビデンスに基づいた保全（evidence-based conservation）」を提唱し、生態学分野に革新をもたらした。さらに世界中の膨大な研究論文の情報を精査・集積したウェブサイト『Conservation Evidence』を構築し、それは誰もがエビデンスとして利用できるものとなっている。

また、博士が主導している「ホライズン・スキヤニング（horizon scanning）」は、人類社会に重大な脅威となる予兆の抽出を行うもので、政策立案や生物多様性の保全戦略等に活用されている。

なお、授賞式は、本年11月12日（火）に大阪で開催する予定。



写真画像ファイルは次のURLにあります。

<https://www.expo-cosmos.or.jp/main/cosmos/2024photo.html>

1. 授賞の対象

花と緑に象徴される地球上のすべての生命体の相互関係およびこれらの生命体と地球との相互依存、相互作用に関し、地球的視点からその変化と多様性の中にある関係性、統合性の本質を解明しようとする研究活動や業績であって、「自然と人間との共生」という理念の形成発展に特に寄与すると認められるもの。

上記の観点から、以下の点を重視する。

- (1) 分析的、還元的な方法ではなく、包括的、統合的な方法による業績であること。
- (2) 地球的視点にたった業績であること。特定の地域や個別的現象に関するものであっても、普遍性があること。
- (3) 直接的な問題解決型ではなく、長期的な視野をもつ業績であること。

2. 選考の経緯

2024年4月から6月までコスモス国際賞選考専門委員会を3回開催し、122件を対象に審査した上、6月24日開催のコスモス国際賞委員会で候補者を決定した。

<2024年コスモス国際賞の選考対象>

2022年37件、2023年39件、2024年46件 合計122件 (24カ国)

<国別内訳>

日本(30)、アメリカ(23)、イギリス(18)、ドイツ(10)、タイ(8)、カナダ(5)、スロバキア(5)、ブラジル(4)、フィリピン(3)、イタリア(2)、オーストラリア(2)、オーストリア(2)、フランス(2)、ベルギー(2)、ペルー(1)、イスラエル(1)、インド(1)、オランダ(1)、ケニア(1)、シエラレオネ(1)、スウェーデン(1)、スペイン(1)、台湾(1)、デンマーク(1)

※二重国籍はそれぞれカウント

3. その他

(1) 授賞式

令和6年11月12日(火)、住友生命いずみホール(大阪府中央区)で行う。

(2) その他

受賞者には賞状、賞牌および副賞(4,000万円)を贈呈する。

添付資料

- ・受賞者の概要
- ・授賞理由
- ・その他(歴代受賞者、コスモス国際賞委員会委員・選考専門委員会委員名簿)

受賞者の概要

氏名 ウィリアム・ジェームズ・サザーランド
William James Sutherland

生年月日 1956年 4月 27日 (68歳)

国籍 イギリス

役職 ケンブリッジ大学動物学科 研究部長
セント・キャサリNZ・カレッジ 名誉フェロー

学歴

1974-1977年 イースト・アングリア大学 学士
1977-1980年 リバプール工科大学 博士

主な職歴

1980-1982年 英国自然環境研究会議の博士研究員としてオックスフォード大学動物学科にて勤務

1982-1983年 リバプール大学 講師

1983-1985年 イースト・アングリア大学環境科学部 講師

1985-2006年 イースト・アングリア大学生命科学部 講師、リーダー、教授

2006-2023年 ケンブリッジ大学動物学科ミリアム・ロスチャイルド保全生物学講座 教授

2023年 ケンブリッジ保全イニシアチブ 会長

2023年・現在 ケンブリッジ大学動物学科 研究部長

主な受賞など

2008-2024年 セント・キャサリNZ・カレッジ Professorial フェロー

2013年 保全生物学会(SCB) 特別功労賞

2015年 「保全生物学におけるイースト・アングリア大学ビル・サザーランド奨学金」がイースト・アングリア大学により設立

2021年 「エビデンスに基づく保全への貢献」により、大英帝国勲章コマンダー(CBE)

2023年 ECI 賞 (陸域生態学)

2023年 英国王立協会フェロー

2024年 セント・キャサリNZ・カレッジ 名誉フェロー

2024年 CIEEM(Chartered Institute of Ecology and Environmental Management) メダル

主な著書

1. Sutherland, W.J. (2022) *Transforming Conservation: a practical guide to evidence and decision making*. Open Books
2. Sutherland, W.J., Brotherton, P.N.M., Davies, Z.G., Ockendon, N. Pettorelli, N. & Vickery J.A. (eds) (2020). *Conservation Research, Policy and Practice* Cambridge University Press
3. Sutherland, W.J. (2006) (ed). *Ecological census techniques: a handbook*. Cambridge University Press. Second edition.
4. Sutherland, W.J. (1996) *From Individual Behaviour to Population Ecology*. Oxford University Press.

授賞理由

ウィリアム・ジェームズ・サザーランド博士は、生物多様性の保全に関わる学際分野「保全科学 (conservation science)」のパイオニアであり、生態学の基礎研究から環境政策への提言まで、多様な研究と活動の実績をもつ研究者である。特に博士が提唱した「エビデンスに基づいた保全 (evidence-based conservation)」という概念は、地球規模で進行する生物多様性の減少を食い止める活動に寄与する革新的な知識の統合であり、これを確立・実行・普及し、先駆的な業績をあげた。

サザーランド博士は、鳥類を愛するナチュラルリストであり、当初から行動や生態についての研究に取り組んできた。一連の研究を通して「他個体の振る舞いの中で個体が下す意思決定を予測し、それから個体群の挙動を予測する」という合理的な理論を考案し、それまで別個の分野として発展してきた行動生態学と個体生態学の両分野の統合を可能にした。

その後 2000 年には、上述した「エビデンスに基づいた保全」という概念を生み出し保全生態学の分野に革新をもたらした。また、2004 年にはウェブサイト『Conservation Evidence』を立ち上げ、公開した。これは、17 か国語で書かれた 160 万件もの膨大な数の研究論文を網羅的に精査し、あらゆるタイプの生息地（森林や草原など）と分類群（鳥類、両生類など）における保全活動の成功や失敗についての情報（8,600 件以上）を特定し、集積したもので、生物多様性の保全に関心のある誰もが容易にエビデンスとして利用できるようになっている。このウェブサイトは、医師が参照する医療効果についてのエビデンス集から着想を得たもので、個人の経験や知識、他人からの伝聞のみに頼って行われてきたそれまでの生物多様性の保全からの脱却を可能にした。これには、保全団体や資金提供団体を含む 1 万 5 千人以上の常連ユーザーがおり、世界中の保全に関する意思決定プロセスに革命をもたらしている。サザーランド博士は、こうした活動を通してこれまで約 100 名の博士課程学生やポスドク研究者の指導、そして 60 か国以上の約 3,000 名との共同研究を行うなど、人材育成の面での顕著な実績をあげている。

さらにサザーランド博士は、研究者と実務者、政策立案者と協同し、将来の人類社会に重大な脅威となり得る可能性のある変化の予兆をいち早く捉え、政策立案に資し、リスクを減らすことを目的とした「ホライズン・スキャニング (horizon scanning)」を毎年実施している。これは、生物多様性の保全戦略や持続的な食糧生産、資金調達の指針として活用されている。

現在、人類活動の影響により生物多様性の減少が加速度的に進み、その対応は喫緊の課題である。サザーランド博士による効率的な保全へのアプローチは、多くの生物種や生態系、ひいては地球全体の自然環境保全に資する画期的成果であり、包括的、統合的な方法による業績としてコスモス国際賞の授賞にふさわしいと評価した。

受賞者コメント

2024年コスモス国際賞を賜り、嬉しく思います。私の生涯の目標は、コスモス国際賞の目標と同じ「自然と人間との共生」です。

私は子どもの頃にバードウォッチングを始め、その後、自然史の他の分野にも興味を広げていきました。非常に幸運なことに、私が学生の頃、行動生態学と現代個体生態学という二つの分野が登場しました。私は、チャーリー・クレブスの『Ecology』から大きな影響を受けました。夏休みの間中、トルコで5人の友人たちと渡り鳥を数えながらキャンプをしていたとき、私は本を二つに分割して、他の友人たちも読めるようにしました。アイデアが分かりやすく説明されているその本は、私に自然界の仕組みを教えてくださいました。その数カ月後、ロバート・メイの著書

『Theoretical Ecology』が出版され、私はすっかり刺激を受けました。この本は面白いアイデアの連続でした。私は空き時間に自然史を勉強し、保全に協力しました。特に書籍からの情報を好むこと、アイデアの探求、自然史の学習、自然保護の取り組みは、私の人生の基盤である四つの一貫したテーマになっています。

政策立案の方法については、深刻なギャップを目にしました。一つは、私たちが、将来考えられる計画への対応を検討するのではなく、過去を振り返りがちだったことです。そこで私たちは、将来起こり得る問題について検討するため、「ホライズン・スキャニング (horizon scanning)」という年間プロセスを策定しました。最初のもは2007年に発表され、人工肉や人工光、マイクロプラスチック、そして、携帯電話による環境データ収集について扱われていました。これらは全て、当時はほとんど知られていなかったことでした。また、政策立案者や実務者に対して、最も回答してほしい質問を尋ねていなかったことにも驚きました。そこで私は、地域社会からそのような質問を投げかけるためのプロセスを考案しました。さらに、実践者が文献を入手することが難しく、十分に利用されていない文献が大量にあることにも驚きました。その後、私は「エビデンスに基づいた医療」について耳にし、「エビデンスに基づいた保全」に相当するものが必要だと考えたのです。私は、ケンブリッジのチームと1,100人の協力者からなる国際チームと共に、この20年間の大半をその活動のために費やしてきました。このプロセスの鍵となるのが、ウェブサイト www.conservationevidence.com です。このウェブサイトでは、3,000を超える保全活動の有効性に関するエビデンスをレビューしています。

私は、意思決定プロセスを変えることを切望しています。これまでに、さまざまな方法で政府に助言してきました。私たちはさまざまな協力者と共にエビデンスに基づいた意思決定を行い、エビデンスを実践に根付かせるプロセスのためのツールキットを作成しました。この作業は、オープンアクセスの書籍『Transforming Conservation: a Practical Guide to Evidence and Decision Making』(2022年)にまとめられています。

私は近年、YouTubeチャンネル『Bill Sutherland's Conservation Concepts』(<https://www.youtube.com/channel/UCTfEVkIZsJEUqFXj9Lokf3g>)を開設することにしました。多くの人々、特に次の世代が、読むことよりも主に動画を視聴することで学んでいることが分かったからです。動画はX(旧Twitter)にも掲載しますので、140秒以内でなければなりません。絶滅の負債やシフティング・ベースラインなどの複雑な問題を取り上げ、例を挙げながら説明を試みたり、結果について考察したりするのを楽しんでいます。私は少年の頃、自然に興味はあっても科学についてはほとんど知りませんでした。動画を撮影する際は、その頃に自分が学びたかったことについて考えたり、経験豊かな自然保全活動家である友人たちのために、何か新しいことを加えたりするようにしています。

私は、アイデアを探求し続けたいという願いから、コンピューティング・ラボの学者を含むチームと共に、人工知能(AI)に取り組んでいます。これは非常に速いスピードで変化し、刺激的です。また、AIに関する機会や課題を特定するために、チームで「ホライズン・スキャニング」演習も行いました。

コスモス国際賞を賜り、大変光栄に存じます。今後も力の限り、私たちに共通の目標を追求し続けていきたいと思えます。

コスモス国際賞歴代受賞者（肩書きは受賞時）

「コスモス国際賞」は、「自然と人間との共生」という理念の発展に貢献し、「地球生命学」とも呼ぶべき、地球的視点における生命相互の関係性、統合性の本質を解明しようとする研究活動や学術活動を顕彰するために設けられた国際賞です。

1993年（第1回）受賞者

ギリアン・フランス卿【イギリス】 王立キュー植物園園長

南米アマゾン地域を中心とする熱帯植物研究の権威。地球全域の植生を統一データ化する「地球植物誌計画」を提唱、世界の植物学者とネットワークを組んで実現に努力した。

1994年（第2回）受賞者

ジャック・フランソワ・バロー博士（物故者）【フランス】 パリ国立自然史博物館教授

太平洋の島々の自然と人々の暮らしについて民族生物学的な調査、研究を行い、これをもとに人間と食糧をテーマに、全地球的な視点からユニークな考察を発表した。

1995年（第3回）受賞者

吉良 龍夫 博士（物故者）【日本】 大阪市立大学名誉教授

光合成による植物の有機物生産の定量的研究をもとに、生態学の新分野となる生産生態学を確立。東南アジア地域の熱帯林生態系の研究で指導的な役割を努めた。

1996年（第4回）受賞者

ジョージ・ビールズ・シャラー博士【アメリカ】 野生生物保護協会科学部長

40年にわたり、世界各地で様々な野生生物の生態と行動を研究。『マウンテンゴリラ・生態と行動』『ラストパンダ』など数多くの著書で全世界に野生動物の実態を知らせた。

1997年（第5回）受賞者

リチャード・ドーキンス博士【イギリス】 オックスフォード大学教授

1976年に出版された著書『利己的な遺伝子』で、生物学の常識を覆す大胆な仮説を発表。その後も、生物の進化について新しい見解を提示して、学会に論争を起こしている。

1998年（第6回）受賞者

ジャレド・メイスン・ダイヤモンド博士【アメリカ】 カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授

医学部教授として生理学を研究する一方、40年にわたりニューギニアの熱帯調査を行い、これらを基に人類の歴史的な発展を再構成したユニークな考察を発表した。

1999年（第7回）受賞者

呉 征鎰（ウー・チェン・イー）博士（物故者）【中国】

中国科学院昆明植物研究所教授・名誉所長

中国を代表する植物学者。中国を拠点に東アジア地域の植物の調査研究に取り組み、中国全土の植物の種の多様性を網羅する『中国植物誌』の編集を主導、刊行を実現させた。

2000年（第8回）受賞者

デービッド・アッテンボロー卿【イギリス】 映像プロデューサー、自然誌学者

野生生物のドキュメント映像のパイオニア。BBC時代から退社後を含め、約半世紀にわたって、地球上の野生の動植物の生の姿を、優れた映像で全世界に伝えた。

2001年（第9回）受賞者

アン・ウィストン・スパーン教授【アメリカ】 マサチューセッツ工科大学教授

都市と自然は対立するものでなく、周辺の地域環境と調和し、その一部として存在する都市の構築が可能であるとし、都市が自然との調和をはかりながら発展する方策を示した。

2002年（第10回）受賞者

チャールズ・ダーウィン研究所【エクアドル】

1964年設立の国際的 NGO・NPO 組織。南米エクアドル領のガラパゴス諸島で、ゾウガメ、イグアナなど、特異な固有生物の調査研究と保護に当たっている。

2003年（第11回）受賞者

ピーター・ハミルトン・レーブン博士【アメリカ】 ミズーリ植物園園長

米国を代表する植物学者で、地球の生物多様性の保全を提唱した国際的な先駆者。常に地球的な視点で生命の問題を考え、学術と実践両面で自然と人間との共生に貢献した。

2004年（第12回）受賞者

フリーヤ・カラビアス・リジョ教授【メキシコ】 メキシコ国立自治大学教授

途上国の立場から全地球的な環境問題を考え、フィールドワークとさまざまな学問分野の研究を統合したプログラムを実施し、異なる条件下での困難な課題に優れた成果を挙げた。

2005年（第13回）受賞者

ダニエル・ポーリー博士【カナダ】

ブリティッシュ・コロンビア大学水産資源研究所所長・教授

漁業と海洋生態系の関連を包括的に研究。海洋生態系保全と水産資源の持続的利用を可能にする科学的モデル開発など、海洋生態系と資源研究の分野で優れた業績を収めた。

2006年（第14回）受賞者

ラマン・スクマール博士【インド】 インド科学研究所 生態学センター・教授

ゾウと人間との生態関係や軋轢への対処をテーマとした研究から、生物多様性保護と自然環境の保全全般にわたる多くの提言を行い、かつ実行し、野生生物と人間との共存という分野での先駆的な取り組みを行なった。

2007年（第15回）受賞者

ジョージナ・メアリー・メイス博士（物故者）【イギリス】

ロンドン大学自然環境調査会議個体群生物学研究センター所長兼教授

絶滅危惧種を特定・分類し、科学的な基準を作成することにおいて指導的役割を果たし、種の保全、生物多様性保全に大きく貢献する取り組みを行なった。

2008年（第16回）受賞者

ファン・グエン・ホン博士【ベトナム】 ハノイ教育大学名誉教授

戦争や乱開発がマングローブの生態系に壊滅的な打撃を与えたベトナムで、マングローブの科学的、包括的な調査・研究を行い、マングローブ林の再生に大きな成果をあげた。

2009年（第17回）受賞者

グレッチェン・カーラ・デイリー博士【アメリカ】 スタンフォード大学教授

人類社会が依存する生物多様性のもつ「生態系サービス」の価値を包括的に捉えて、「国連ミレニアム生態系評価」など国際的な取り組みに貢献するとともに、生態学・経済学を統合し、自然資本の持続的な利用のために「自然資本プロジェクト」を実施する等大きな役割を果たした。

2010年（第18回）受賞者

エステラ・ベルグレ・レオポルド博士（物故者）【アメリカ】 ワシントン大学名誉教授

父アルド・レオポルド氏（1887－1948）が提唱した「土地倫理」を継承・追及するとともに、アメリカ各地においてこの考えを広げるなど、多大な功績を残した。

2011年（第19回）受賞者

海洋生物センサス科学推進委員会 事務局：アメリカ

海洋生物の多様性、分布、生息数についての過去から現在にわたる変化を調査・解析し、そのデータを海洋生物地理学情報システムという統合的データベースに集積することにより、海洋生物の将来を予測するプロジェクト「海洋生物センサス」を主導した。

2012年（第20回）受賞者

エドワード・オズボーン・ウィルソン博士（物故者）【アメリカ】 ハーバード大学名誉教授

アリの自然史および行動生物学の研究分野で卓越した研究業績をあげ、その科学的知見を活かして人間の起源、人間の本性、人間の相互作用の研究に努めたほか、生物多様性保全や環境教育を推進する実践家として活動した。

2013年（第21回）受賞者

ロバート・トリート・ペイン博士（物故者）【アメリカ】 ワシントン大学名誉教授

生物群集の安定的な維持に捕食者の存在が不可欠なことを、明快な野外実験によって示し、キーストーン種という概念を提唱した。一連の研究は、生物多様性を扱う群集生態学の分野に新しい視点をもたらし、生態学はもとより保全生物学や、一般の人々の生物多様性への理解に大きな影響を与えた。

2014年（第22回）受賞者

フィリップ・デスコラ博士【フランス】 コレージュ・ド・フランス教授

人類学者として、南米アマゾンに住む先住民アチュアの人々の自然観とそこの自然と関わる諸活動に焦点を当て、これらの綿密な調査から哲学的な思想へと論を進め、自然と文化を統合的に捉える「自然の人類学」を提唱した。

2015年（第23回）受賞者

ヨハン・ロックストローム博士【スウェーデン】

ストックホルム・レジリエンス・センター所長

人類が地球システムに与えている圧力が飽和状態に達した時に不可逆的で大きな変化が起こりうるとし、プラネタリーバウンダリーを把握することで、壊滅的な変化を回避でき、その限界がどこにあるかを知ることが重要であるという考え方を示した。

2016年（第24回）受賞者

岩槻 邦男 博士【日本】 東京大学名誉教授

生物多様性を探求し、伝統的な手法に加えて、分子系統的な手法も取り入れつつ、包括的かつ多面的に植物系統分類学を発展させた。また、系統分類学を含めた多様性生物学による生物の統合的理解の重要性を説き、そのような理解が生物の豊かさや自然との共生を支える重要な原理であることを明らかにした。

2017年（第25回）受賞者

ジェーン・グドール博士【イギリス】 ジェーン・グドール・インスティテュート創設者

1960年から、野生チンパンジーの研究を続け、その全体像を明らかにするとともに、チンパンジーが住む森を保全するための植林活動や環境教育活動を行った。博士が創案した青少年が担い手となる環境教育プログラム「ルーツアンドシューツ」は99カ国で約15万団体が、その活動を展開している。

2018年（第26回）受賞者

オギュスタン・ベルク博士【フランス】 フランス国立社会科学高等研究院教授

和辻哲郎の著作「風土」から大きな影響を受け、風土概念をさらに拡充、深化、発展させ、「風土学（*mésologie*）」と名づけられる新たな学問領域を切り拓き、自然にも主体性があるという「自然の主体性論」を提唱した。

2019年（第27回）受賞者

スチュアート・L・ピム博士【アメリカ】 デューク大学教授

地球上の生物の食物網の複雑さや種の絶滅速度等についての理論を提唱し、地球規模の生物多様性に関する政策などに大きな影響を与えると共に、生物保全活動を実践する団体を支援するNGOを設立するなど、生態系や生物多様性の保全に対して、科学と実践の両面において多大な功績を収めた。

2021年（第28回）受賞者

ピーター・ベルウッド博士【オーストラリア】 オーストラリア国立大学名誉教授

考古学、言語学、人類生物学の学際的研究による「初期農耕拡散仮説」を提唱し、農耕の起源と初期農耕民の移動・拡散過程を明らかにするとともに、この研究を通して、自然と人間との共生の歴史を統合的な視点から探求した。

2022年（第29回）受賞者

フェリシア・キーシング博士【アメリカ】 バード大学教授

自然生態系の生物多様性と、人獣共通感染症病原体が人間社会へ伝播するリスクとの関係性を、実践的な調査研究によって明らかにし、ポストコロナ時代における自然と人間の共生のあり方に科学的な示唆を与えた。

2023年（第30回）受賞者

クリスティン・シュレイダー＝フレシエット博士【アメリカ】

ノートルダム大学 オニール家講座 名誉教授

環境問題を考察する際に「環境正義」の概念が重要であることを提唱し、現在の環境問題に対する姿勢に警鐘を鳴らした。博士が積極的に関与してきた定量的リスク評価手法に基づく「環境正義」は、誰もが健全な環境で暮らせる社会の実現を目指す際の不可欠な指針となっている。

2024年コスモス国際賞 賞委員会委員および顧問
International Cosmos Prize Committee

2024. 4 (五十音順)

役職 Position	氏名 Name	専門分野 Specialty	職名 Official Title
委員長 Chairperson	山極 壽一 Dr. YAMAGIWA Juichi	人類学、霊長類学 Anthropology, Primates	総合地球環境学研究所所長 Director General, Research Institute for Humanity and Nature
副委員長 Vice Chairperson	中西 友子 Dr. NAKANISHI Tomoko	放射線植物生理学 Radioplant physiology	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
委員 Member	秋道 智彌 Dr. AKIMICHI Tomoya	生態人類学 Ecological anthropology, Ethno-biology	山梨県立富士山世界遺産センター所長 Director General, Fujisan World Heritage Center
委員 Member	浅島 誠 Dr. ASASHIMA Makoto	発生生物学 Developmental biology	帝京大学 特任教授 Research Professor, Teikyo University
委員 Member	池内 了 Dr. IKEUCHI Satoru	天文学 Astronomy	総合研究大学院大学名誉教授 Professor Emeritus, The Graduate University for Advanced Studies
委員 Member <small>選考専門委員会委員長兼任</small>	池谷 和信 Dr. IKEYA Kazunobu	環境人類学 Environmental anthropology	国立民族学博物館名誉教授 Professor Emeritus, National Museum of Ethnology
委員 Member	白山 義久 Dr. SHIRAYAMA Yoshihisa	海洋生物学 Marine biology	京都大学名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
委員 Member	西澤 直子 Dr. NISHIZAWA Naoko	植物分子生物学 Plant molecular biology	石川県立大学学長 President, Ishikawa Prefectural University
委員 Member	林 良博 Dr. HAYASHI Yoshihiro	動物資源科学 Animal science and resource	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
委員 Member	横張 真 Dr. YOKOHARI Makoto	緑地環境科学 Landscape and environmental science	東京大学総括プロジェクト機構 特任教授 Project Professor, Organization for Interdisciplinary Research Projects, The University of Tokyo
委員 Member	鷺谷 いづみ Dr. WASHITANI Izumi	生態学・保全生態学 Ecology, Conservation ecology	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
委員 Member	和田 英太郎 Dr. WADA Eitaro	生物地球科学 Biogeochemistry	京都大学名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University

役職 Position	氏名 Name	専門分野 Specialty	職名 Official Title
顧問 Advisor	岩槻 邦男 Dr. IWATSUKI Kunio	植物分類学 Systematic botany	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
顧問 Advisor	尾池 和夫 Dr. OIKE Kazuo	地球科学 Geoscience	京都大学名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
顧問 Advisor	岸本 忠三 Dr. KISHIMOTO Tadamitsu	免疫学 Immunology	大阪大学免疫学フロンティア研究センター特任教授 Project Professor, Immunology Frontier Research Center, Osaka University
顧問 Advisor	中村 桂子 Dr. NAKAMURA Keiko	生命科学・生命誌 Biohistory	JT 生命誌研究館名誉館長 Honorary Director, Biohistory Research Hall

2024年コスモス国際賞 選考専門委員会委員
International Cosmos Prize Screening Committee of Experts

2024. 4 (五十音順)

役 職 Position	氏 名 Name	専門分野 Specialty	職 名 Official Title
委員長 Chairperson	池谷 和信 Dr. IKEYA Kazunobu	環境人類学 Environmental anthropology	国立民族学博物館名誉教授 Professor Emeritus, National Museum of Ethnology
副委員長 Vice Chairperson	佐倉 統 Dr. SAKURA Osamu	科学技術社会論 Science and technology studies	東京大学大学院情報学環 教授 Professor, Interfaculty Initiative in Information Studies, The University of Tokyo
委員 Member	沖 大幹 Dr. OKI Taikan	地球水循環システム Global Hydrological System	東京大学大学院工学系研究科 教授 Professor, School of Engineering, The University of Tokyo
委員 Member	モンテ・カセム Dr. Monte Cassim	環境科学 Environmental science	国際教養大学理事長兼学長 President, Akita International University
委員 Member	亀山 康子 Dr. KAMEYAMA Yasuko	国際関係論 International relations	東京大学大学院新領域創成科学研究科 教授 Graduate School of Frontier Sciences, The University of Tokyo
委員 Member	深町 加津枝 Dr. FUKAMACHI Katsue	緑地環境科学 Landscape and Environmental science	京都大学地球環境学堂 准教授 Associate Professor, Graduate School of Global Environmental Studies (GSGES), Kyoto University
委員 Member	シュテファン・ホーテス Dr. Stefan Hotes	景観生態学 Landscape Ecology	中央大学理工学部人間総合理工学科 教授 Professor, Faculty of Science and Engineering, Chuo University
委員 Member	宮下 直 Dr. MIYASHITA Tadashi	生物多様性科学 Science of Biological Diversity	東京大学大学院農学生命科学研究科 教授 Professor, Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo
委員 Member	湯本 貴和 Dr. YUMOTO Takakazu	植物生態学 Plant Ecology	京都大学名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
委員 Member	横山 潤 Dr. YOKOYAMA Jun	植物分類学 Systematic botany	山形大学理学部 教授 Professor, Faculty of Science, Yamagata University